

新製品開発におけるフロント・エンド・ローディング

‘Innovative Made in Japan’を導く

— 品質管理の崩壊と製品開発 —

(株)ジョンクエルコンサルティング 落合 以臣

A Front End Loading in New Product Development

“Collapse of quality management and a new product development”

Shigemi Ochiai, Jonquil Consulting Inc.

*Keywords: ブランド・モノづくり・スローガン・PDCA・価値観*

“Made in Japan”のブランドを持つ日本の製品は、世界でも賞賛されていることは、いまさらながらいうことではないかもしれませんが。特に、アジア諸国からの爆買いは、未だにその勢いを失うことはないようです。しかしながら、ひとつひとつの製品を見ていきますと、以前と比べて品質が低下したように思われます。ある意味では、モノづくりの原点を効率化という名のもとに、コストダウンを強く励行しているために、製品価値が失われつつあるといっても過言ではないでしょう。数年前には合言葉のように、「モノづくり日本の復活」というスローガンが流行りましたが、現在ではどうでしょうか。ほとんど、その囁きさえ聞こえなくなってしまうのではないのでしょうか。このまま行けば、確実にモノづくりが衰退していくと思われます。

こうしたことに鑑みますと、品質管理がお粗末になってしまったのは、ひとえに設計と生産現場が離れてしまったとも言えます。本来であれば、設計の不具合を現場の目を通して、PDCAで是正していくという思想がありました。PDCAは、もともとは生産管理や品質管理などの管理業務を円滑に進めるための手法として、W・エドワーズ・デミング博士らが提唱した考え方であることは周知通りです。しかしながら、PDCAという考え方は単独で機能するのではなく、モノづくり全体で行うべき手法であるといえます。ところが、現在のモノづくりはひとりひとりの成果を重要視するあまり、グループとしての働きを阻害する要因となっていると思われます。つまり、建前では総合力といいながら、実は個人を評価する制度であれば、自身の価値判断として損得の考えが起きても何の不思議もないでしょう。温情的な思想があった時代は、確かにひとりひとりの成果を追及されるという制度もあったでしょうが、モノづくりはそういうものではないと、自身を逆境の立場に追い込み潜在意識と葛藤しながら生きてきたはずで、ところが、現在ではどうでしょうか。そういうセンチメンタルな気持ちを持つほどばかばかしいことはないという風潮になっています。なんて言えばよいのでしょうか。人間が持っている「ここから先は譲れない」という一種の人間力、あるいはその人の価値観みたいなものが、本当のモノづくりを支えてきたのかもしれませんが。

世界経済及び状況がドラスチックに変換している中で、身を捨ててまでとは言いませんが、少なくとも製品開発とはという基本的な呼び掛けを常に自身に問いかけることも必要なのかもしれません。とにかく、Made in Japanほどのブランド名は、ほかにはないと言い切っていいかもしれません。

この JQ International Review が、愛読される方の背中をさらに押すことができれば幸いです。

---